

## 〔研究ノート〕

## 雪村の奇思(4) —『本朝画史』の雪村観(その4) —

前回(美のたより66号)は、『本朝画史』雪村伝の「潑墨は雅淡」ということについて説明しましたが、今回は、そのつづきの「務めて華藻を去り、大低略して、新意を出だす」について述べることにします。

「務去華藻」は、『図絵宝鑑』巻四の馬和之についての記述の中からとられた言葉です。「華藻」とは、美しい飾りという意味ですが、ここでは絵画の表現における本質的でない要素をさしていると考えられます。余計なものを切りすて、力強い筆法で、形象を単純化していき、作者の意図を直截的に表わす、そうすることで、雪村は独自の新しい工夫を加えているといっています。前回の潑墨山水もそのような表現法です。雪村の新意の一つに、簡潔な線描によって、物象のもつ生気を運動の勢の中に解釈していることがあげられます。そのことを示す好例は、「呂洞賓図」、「波岸図」、「風濤図」などです。ま

た、山水図では、中景や遠景を省略し、主要モチーフを前景において大きく、強くあつかっていることも、雪村画の特徴の一つです。つぎに、「風濤図」について考えてみます。

「風濤図」は、雪村の初期の「瀟湘八景図画帖」のうちの「遠浦帰帆図」を再構成した作品です。この「遠浦帰帆図」は雪村の独創ではなく、おそらく南宋時代の馬遠派の院体画山水にヒントを得て描いたものと考えられます。対角線構図法で、前景手前に岩石と樹木を配置する構成、遠山の描写などは馬遠派山水図の特徴と共通します。あるいは、狩野探幽が自由模写した、南宋画院の陸青(李唐系)の「山水図」を手本にしたのかもしれませんが。陸青の「山水図」では主景は左辺下に寄せられていますが、そのモチーフは「遠浦帰帆図」と基本的に同じです。遠景を描き、奥行きを表わしていることも共通します。しかし、「風濤図」では、遠景は省略され、風を視覚的に描いているだけです。ここでは空間の拡がりを表わそうとする意図は感じられません。

しかし、それにかわって、疾走する帆掛船、激しい海風でかしぐ岸の古木、竹林の茅屋、大きな波頭など、ものの本質を見極め、力強い簡潔な線描で描いています。ものの内から湧きあがってくる力、雄渾な気魄を提示しようとしていると考えられます。(林 進)

山水図(陸青様) 狩野探幽筆



遠浦帰帆図 雪村筆



風濤図 雪村筆 野村美術館蔵

